

## 2 保育において子どもの発達を促す

### 1 保育における子どもの発達とは

子どもが積み木を積んでいる。子どもがごっこ遊びを始める。砂場で穴を掘っている。庭でウサギの世話をしている。どれも幼稚園によく見られる光景である。その一こま一こまに知的な発達の芽生えがある。その折々に、子どもが頭を使って工夫しているかどうか、考えているのかがポイントなのである。

積み木を積んでいるときに、ただ機械的に、また力任せに積むのではなくて、一つ積んでは、うまく行っているかを考えているだろうか。かなり積み木に慣れてきたなら、全体として例えば「おうち」になっているかどうか、居間や台所らしくなっているかなどを考えて、それに合わせて、作り替えたりしているだろうか。

先生に、車が作れないから作って、と言ってきたときに、「自分で考えて」と言うだろうか。それとも、すぐに作ってやるだろうか。自分でも大体は作れそうだ、後ちょっとの工夫で行けると判断したら、たぶん、自分で考えさせるだろう。そうではなく、まだまだ作り方も見当がつかない3歳児などであれば、作ってやるけれど、子どもに作り方がよく分かるように、ゆっくりと手順を示すかもしれない。少し出来そうな子どもなら、ある程度先生が作って最後のところを子どもにやらせたりするかもしれない。

先生が子どもの考える力をいかに引き出すかは、子どもの有能感を大事にすることでもある。自分で出来た、と思えるように、程々に助力しながら、でも、完成して子どものイメージが実現するようにする。今子どもが出来そうなことを見取って、そこまでは子どもに任せつつ、出来そうもないし、子ども同士では解決できそうになかったら、助言したり、手伝ったりするのである。

園の中にはいろいろなものがあり、人がいる。その出会いの中で、子どもはいろいろなことに興味を持って、取り組む。こんなことをやってみたい、こんな風に完成してみたい、これくらい上手になりたいと思う。そこで、それを目指して頑張るだろう。

そのときに、ただやたらに力を入れて、頑張るだけでなく、ちょっと立ち止まって、どうしたら上手に出来るかなと考えるところで、完成度が上がるだけでなく、子どもの考える力が伸びるのである。他に上手な子がいるかもしれない。どんな風をしているのだろう。よく見て、真似しようとする。簡単に真似は出来るものではない。そこにささやかであっても、工夫が生まれざるを得ない。

熱中して取り組み、試行錯誤している内に、いつの間にかよいやり方をうまく見つけたり、完成したりすることもある。そういったときにも、自分がどのようなところを工夫して、うまく出来たのかとか、どんなことを見つけたかを振り返るようになると、知的な気づきが生まれて、その後の工夫に生きていく。

もっとも、どんな遊びだって、いきなり考えるところからは始まらない。特に幼児の場合にはそうだ。まずは熱中して遊ぶことが大切である。何度も繰り返している内に、少しずつ積み木でも、ウサギでも巧みに扱えるようになっていく。そこで初めて、工夫したり、考え込んだり、気づいたりする余裕も生まれる。小さいうちはまず慣れることそして試行錯誤することをたっぴりと経験させたいものである。

## 2 探求心を育てる

子どもが園に行き、新たに様々なものに出会う。今の子どもは、家にいるときには、家族の元で暮らし、テレビやテレビゲームや家の中の遊びをしていることが多い。3歳までであれば狭い範囲になるには違いないのだが、その上、今の社会では子どもの数も少なく、家の中で機械を相手に楽しく過ごすのが当たり前になっている。そういった狭いところでの暮らし方と、相手が楽しませてくれるという受け身のかかわり方を大きく広げるのが園の役割である。

「世界に出会っていくこと」というと、大げさかもしれない。でも、園に来る前の子どもの環境を思い浮かべれば、園に来て何と多くのもに出会うことだろうか。部屋には大きな積み木がある。もしかしたら、はさみを使うのも初めてかもしれない。砂場に初めて入る子どももいる。水をふんだんに使って遊ぶこともそれまでなかっただろう。草むらで初めて虫を探す。畑で野菜を育てていく。

同年代の子どもと遊ぶこと自体、それまで経験していなかったかもしれない。一人くらいはいたとしても、こんなに大勢で遊ぶことはない。親以外の大人と付き合ったこともありそうにない。

世の中にこれほど多くのものがあり、いろいろな人がいることを子どもは初めて知る。その一つ一つがただあるのではなく、その各々の特徴があり、個性を持ち、それにふさわしい対応がある。こうすればこうなると分かっていく。石の下を探すと、だんご虫が見つかる。触れば、丸まって面白い。でも、床に放り出しておくと、死んでしまう。

園に来ると、毎日のように発見がある。大勢で積み木を積み、巧技台をつなげると、大きな家が出来上がる。いろいろな知恵を出し合っていくと、茶の間があったり、お風呂場が出来たり、素敵な2階建ての屋上のある家になったりする。宇宙基地になって、ロケットが発進するかもしれない。不思議なことがたくさん起こる。花びらを摘んで、水に入れて、つぶすと、水にきれいな色がつく。ジュースみたいだ。

子どもがいろいろなことに興味を持って、好奇心を発揮することで、発達の基盤が作られていく。その上で、もっと面白くしたいと思うところで、さらにそのものの性質を知ることになっていく。だんご虫を見つけない。園中を探し回る。どうもしめった感じのところが好きみたいだと分かっていく。だんご虫を集めて、飼育していきたい。どうやって生かしていったらよいだろう。先生に聞いたり、図鑑を調べたりする。水や食べ物があるらしいと分かっていく。

好奇心を広げ、次にそれが探求心へと育っていくのである。どうすれば、自分の願うように出来るだろうか。次にはどうなるのだろうか。その仕組みを教えてくれるものがどこかにないだろうか。子どもの興味は次第に知的なものへと育っていく。

探求心を育てるには、広がった好奇心をさらに深める必要がある。二段、三段と子どもの探求が進むところで、探求心が湧き出てくる。もっと知りたいと思って、もっと追求してみると、確かにもっと面白くなっていくという経験が元になる。ただボタンを押して、目を奪う光景が展開するというのでは足りないのである。自分の力を発揮し、どうやったら深められるかを工夫して、その先の広がりをものにしていく。物事のさらに奥を知りたいという気持ちは、表面だけで満足するのではなく、その先を実際に探求することで育っていくのである。

### 3 物事への関心を育てる

#### (1) 文字への関心を育てる

文字の読み書きは、小学校の教育の最も基礎となる学力のせい、幼児でも重視されている。知的な発達を考えると、文字の読み書きを思い浮かべる人は多いようだ。しかし、実は、幼児期の文字の読み書きは知的な影響に強く影響するものではない。知的な発達はもっと遙かに広いものだし、幼児の活動の至る所で生じている。言葉の発達を取ってみても、その文字が読めることは大事だが、言葉の意味が把握されなければならない。

「氷」であれば、「こおり」と読めればよいのではない。さらに、氷は水が凍ったものだとして理解するだけでもまったく不足している。氷が触ると冷たいこと、暖まると解けて水になること、ジュースの氷も、冬に水たまりに出来る氷も、アイススケートの氷も、皆同じ氷であること、暑いときの氷は気持ちよいけれど、冬の厳しい寒さの氷はうっかり触ると手が凍り付くくらいだということなども分からなければ、氷という言葉を使えたことにならない。しかも、それは、絵本で情景を見て理解するだけでは足りず、冬の朝、息がハ－ハ－と白くなる時に、水たまりの氷に乗ってみたら割れたとか、取ってみたら、手がかじかんだけれど、透明できれいだったこと、それを落としたらガラスみたいに割れたこと、といった思い出と一緒に記憶されて意味を担うようになる。

現代の社会では、文字は覚えるのに特別なものではなくなっている。昔の時代だと、学校の教室で初めて文字に接したかもしれない。でも今は、幼児を囲む至る所に文字が見られる。絵本にはずいぶん小さい年齢から接している。大人向けの新聞や雑誌は幼児は読まないが、大人が読んでいる様子は見ていて、文字を読むという活動には馴染みがある。50音表なども貼ってあるかもしれない。台所や食卓に置いてある瓶詰めや食品の入った箱や飲み物の瓶には、必ず商標や説明書きが書いてある。外に出れば、至る所に広告があり、標識がある。「止まれ」の標識は形や色に特徴がある上に、曲がり角の度にあるので、すぐに覚える。

文字に接する活動が当たり前のことであることも文字の習得を支える。文字を使うことは日常の普通のことだと分かることとともに、何のために文字を使うかが理解されるからである。情報伝達であったり、楽しみのためであったりするのである。

そこで、現代の子どもたちは、かな文字くらいなら一文字ずつを、幼稚園の終わり頃までに、意識して教えなくても大体読めるようになっていく。園のごっこ遊びでも、レストランごっこにメニューを書いたりするとか、書けなければ先生に頼んで書いてもらうといったことはよく見られる。すらすら読めるかどうかは別のことである。そのためには、本に接して、自分で興味をもって、一人で読み始めるようになることが必要である。本が好きになる子どもに育てることが大切になる。

なお、文字を書くことは、読むことと相当に違う種類の活動である。その習得の経路もかなり違う。字を書くことが好きになって、どしどし書いていく子どももいるが、多くの子どもは文字を意識して指導しないと、ちゃんと書けるようにはならない。文字を書くのは、書き順とか、少し斜めにするとか、ややこしい規則がたくさんあるからである。だから、その十分な習得は小学校でやってもらう方が賢明であろう。

## (2) 絵本へのかかわりを育てる

どの園でも絵本の読み聞かせをしていることだろう。また、絵本のコーナーを用意して、いつでも読めるようにしている。いったい何のためにそうしているのだろうか。

もちろん、まずは絵本が好きになってほしいからである。各種の調査でも明らかになっているように、絵本が好きになることで、将来の読書の習慣が育つし、読書が国語力の基礎であることは言うまでもない。少々字を覚えることよりも絵本が好きなことの方がずっと国語の力を伸ばすのに役立つ。好きであれば、読んでもらうことを楽しむだけでなく、自分から合間の時間に絵本に親しむだろう。それが先行き自分から本を読むことに発展する。自分で暇な時間に本を読まないで、学校の国語の時間だけで国語力を伸ばそうとするのは無理がある。言葉は極めて多量の言い回しからなっているので、長い時間をかける必要がある上に、高度な言い回しは本でこそ出会えるからである。

好きになることが大切なのは、単にたくさん絵本や本を読むからだけではない。興味を持って読むから、読みつつ、空想を働かせるだろうし、自分が知っていることと結びつけて、驚いたり、考えたりすることも多いだろう。そうやって、感性も思考も働かせるからこそ、読書は子どもの成長に役立つのである。

よい絵本を読むことも大切である。でも、それも、たくさんの絵本をともあれ読むという基盤があつてのことだ。一種類に片寄らずに、いろいろなタイプの絵本を読むとよい。お気に入りの出来れば、繰り返し読んで覚えてしまうこともあるだろう。絵本で出会う言い回しはその子どものものになっていく。

もちろん、絵本は単に言葉を覚えるためのものではない。想像を通して、子どもの世界を広げるものでもある。絵本には様々な事柄が出てきて、世の中にはこんなことがあるのだ、こんなことも出来るのだと子どもに伝える。子どもが一人で（あるいはぬいぐ

るみと共に) 汽車に乗って、旅をする。現実には出来ないことが可能になるだけでなく、旅ということを示してくれる。都会や田舎の様子や、庭の片隅にいる昆虫の生態やなど、この世界にある多くの驚異に子どもの目を開く。

物語は子どもに勇気とは何かを教えてくれる。ささやかなお使いやお留守番でも、子どもにとっては大冒険である。怪獣のいる島に行くのは本当の冒険だ。主人公は楽しみに、またときに不安を感じつつ、危険を乗り越えていく。そういった物語は、子どもが自分の身に起こっていることについて自分が主人公であること、そして勇気を奮っていったり、根気よく取り組んでいったりする智慧を教えてくれるのである。

絵本はまた園の中で(家庭ならなおさら) ひめやかで親密な空間を作り出すものである。子どもが一人で読みつつ、まわりの騒々しさから離れて、絵本の語る世界に没入する。教師の読み聞かせの語りに耳を傾け、絵に見入る中で、教師との親密な関係に浸る。もっとも、そのためには、クラスで読み聞かせをする際にも、絵本の読み聞かせを統制のための手段とか、ただ機械的な説明などではなく、たとえ大勢が相手でも、教師が一对一での関係を子どもに感じられるような配慮が必要である。

絵本は、丁寧に様々な工夫をページに込めて作られている。その理解は、絵本の隅々までも探索し、堪能して、成り立つものなのである。ただ、筋が分かればよいのではない。親密な空間とは、人間関係の意味だけでなく、絵本を味わうという意味でも必要なことである。集団での読み聞かせでの工夫を望みたいところである。

### (3) 数への関心を育てる

4歳とか5歳くらいの幼児になると、何か同じ種類のものがいくつかあると、すぐに数える時期があるものだ。また、親に数を数えてもらいながら、公園を一周してきて、いくつだったと聞いたりもする。数えること自体に興味があるのだろう。また、数を数えて、大きくなると、自分が大きくなったような気がするのかもしれない。

どうしてそんなに数に関心をもつのだろうか。いわば本能のようなものなのだろう。人間が認識するとき、数というとらえ方はよほどその根本に根ざしたものなのだと思う。ものが一つあるということ、同じ種類のものとしてまとめること、そのどちらも、人間が考えるときの元になることである。数は、同じ種類にまとめた上で、「一つ、一つ、一つ」と繰り返していくところから始まる。

でも、自分は計算なんて嫌いとか、算数は苦手という人は多いはずである。どうしてそんなに幼児とは異なるのだろうか。筆算に入るところで、急に難しくなるのである。「12」と書いて、「じゅうに」と読む。「いちに」では間違いだ。さらに足したり、引いたりすると、繰り上がり・繰り下がりが出てくる。そういった筆算の方法は、大変に特殊なやり方で、教わっても、なかなかすぐに使えるようにならない。だからこそ、小学校で算数の時間があり、計算の練習を長い時間するのである。まして、分数とか、方程式などといったら、高度な技法なのである。

幼児が喜んで数えるのは、それとは違う。どんなものでも数えられることが嬉しいの

である。リンゴだって、人だって、車だって、「1、2、3」と数えてよい。幼児が手にした、いわば万能の抽象力である。

幼児は足し算も引き算も自然にするようになる。おはじきを右手に2個、左手に3個持って、「合わせていくつ？」と問えば、改めて数えなくても、「5個！」と分かるようになる。でも、それは筆算の式を立てて、計算するのではない。おはじきのイメージを思い浮かべて、それを数のイメージに変えつつ、数えていくのである。

様々に数えたり、加えたり、取り去ったりしている内に、数の系列がしっかりしてくる。単に10までとか、20まで数えられるだけでなく、8に2を加えたら、10だとかいった関係が分かってくる。

数を数える機会はいくらでも身の回りにある。何でも数えられるのが数の特性だからである。ただ、そのためには、同じ種類のものがいくつかあって、しかも数えやすく並べてなければならない。そうでないと数えようと思わないし、数えても間違える。ものを整理して、きれいに並べてある環境が大事になる。

砂場に使うスコップは並べてきれいにかけてあるだろうか。ままごと用のカップがいくつか棚に置いてあるだろうか。木の実を拾ったら、並べてみてどれだけ取れたか、見てみることが出来るだろうか。全部を子どもが数えられなくてもよい。ひまわりの種など無理だ。でも、たくさんあって、それが数えられそうだと思うだけでよいのである。

短いものから長いものへ、小さいものから大きいものへと並べておくことも数えることを誘う。もちろん、重さを量ってもよい。誰の取ったサツマイモが一番大きいかは重さで分かる。そのために、秤を置いておいたり、巻き尺があったり、柱に目盛りを刻んでおくことも出来る。何でも巻き尺で巻いて測ると、面白い活動になる。正しい答えを教わったり、正しい測り方や数え方を覚えたりすることが大切なのではない。どんなものでも数えたり、測ったり出来ると感じ取ることが基本なのである。

#### (4) 自然へのかかわりを育てる

自然が子どもの興味をそそることは言うまでもない。草むらを歩けば、虫がいたり、草の実が見つかったり、変わった形の葉があったりする。草花遊びをしたり、虫を探したりすることは子どもの大好きな遊びである。

そんな自然へのかかわりに、どんな知的な意味があるのだろうか。もちろん、将来の科学的興味への始まりである。学校の理科に発展していく。

しかし、もっと幼児の成長と絡み合うところで、自然は大事な意味がある。何より、動植物の生きたもの、そして変化に富んだものが興味を刺激する。動くから面白いという以上に、その命を持った動きは、おそらく、人間が生物として生きることと密接にかかわっているのだろう。同じ命あるものとしての共感が働くのではないだろうか。

自然は独自の動きを持つだけでなく、無数の多様性を持ったものである。同じ虫といっても、アリとダンゴ虫とチョウチョとカブトムシでは、動き方も違うし、見かけも異なる。その種類の中でさらに詳しく見ると、また違いが見えてくる。チョウチョはチョウ

チョとして共通でありながら、その種類に応じて独自の特徴があるのである。無限に多様でありながら、その中に命ある動きを持っているものが動物である。

植物は動きは乏しいのだが、多様性に富んだ変化を示し、時とともに変容していく点では、やはり生命あるものであることが分かる。芽が出ること、葉が色濃く、大きくなること、花が開くこと、葉が色づき、散っていくこと。人工のものではあり得ない、繊細さと、同時に、時に従う一定の歩調を持っている。

それらに目が開かれていくことは、子どもの知的な関心を大きく広げる。人の都合に合った形をしているわけではない。独自のものである。そして、一つ一つが異なるものでもある。だけれども、同じものが無数にある。いったい木にはどれほどの葉がついているのか分からないくらいだ。

それらの自然の不思議さに気づくには、子どもは単に見るだけでなく、触ったり、においを嗅いだり、草花で遊んだり、全身でまた手先でかかわることが必要である。ただ見るだけでは、いろいろな色合いと形があると漠然と分かるだけだ。五感を使い、全身でかかわり、指先を繊細に用いることで、自然の細部までがとらえられていくのである。その上、身体ごと、例えば、落ち葉の山に入り込んだりして、自然の印象は心に深く残っていく。

もっとも、そのような自然がいつも子どもに魅力的であるのではない。虫など、ゴキブリしか知らない子どもには気持ち悪いとしか思えないかもしれない。自然にかかわって遊ぶことがまだない子どもにとっては、自然は人工のものの持つ型通りの機能性を欠いた訳の分からないものであろう。予想外の動きをするし、それを扱うのにマニュアルもあるにしても、その通りにやればよいのではない。

子どもたちが自然に触れるようにするのは、手間がかかるかもしれない。すべてが清潔な場できれいに遊ぶというのではないため、時には親の方で嫌がることもある。でも、それを越えて、かかわりへと導入していくと、次第に面白くなっていく。自然の秘密を見つけると、思いもかけない発見が出てくるからである。

そうやって虫や花や草と遊んでいる内に、動かない自然にも目が向く。水があり、土があり、風が吹き、空には雲が浮かんでいる。それは生きたものを支える大きな舞台としての自然である。ザリガニは、水の中にいて、その水の中の泥に潜んでいることを見つける。水や泥の謎にも気がついていくことだろう。

## **(5) 園外の暮らしへの関心を育てる**

子どもの生活環境の範囲が狭くなっているのではないかと危惧されることが増えてきた。家と園を往復して、後は、部屋の中で遊んでいるとか、あるいはその往復が園バスとか、自家用車になる。さらに、買い物などで出かけても、車で行って、スーパーの中を歩くだけかもしれない。

子どもをもっと街に連れ出さないといけないのではないだろうか。自然に出会うという面とともに、人々の暮らしに出会い、混じり合う経験が必要だと思うのである。暮ら

しの営まれる場としての街が大切である。もちろん、園の中で、教師も子どもも生活して、そこに暮らしがある。子どもは遊ぶだけでなく、片づけ、掃除をし、食事の支度をして、動植物の世話をするだろう。しかし、その園の中の生活が、園の外の暮らしの一部であることは、大人には当然だが、子どもにはそうは思えないのではないだろうか。園の外での暮らしに根付いてこそ、園の生活を通しての保育が意味をなすと思うのである。

家庭があり、家庭こそ暮らしの場ではないかとも思える。しかし、よほど親が意識しないと、家庭で子どもは食べ物を与えられ、後はテレビとテレビゲームをするだけで、せいぜい勉強でもすればほめられて、家事の手伝いとか、家事の様子を眺める機会もないことが多いのではないだろうか。まして、労働の様子を見ることなど、多くの家庭では消えてしまっていることだろう。

街には、店があり、住宅があり、会社があり、郵便局や銀行や消防署や駅がある。美術館があり、博物館があり、図書館がある。道には並木が並び、道ばたに花壇があり、ほんのわずかな土にタンポポやコスモスが咲き、猫が歩き回っている。古い神社やお寺がある。狛犬や仏像が怖そうな顔をしている。

道を歩いたり、庭の手入れをしたり、店にいる人たちも様々である。若い人も年寄りもいる。白い杖を使って歩いている目の不自由な人もいるだろう。車椅子で動いている人もいるかもしれない。外国の人は日本語以外の言葉を使っているし、最近では日本語の上手な人も増えてきた。ファスト・フードの店で若い女性が明るい声を出していたり、学校の前をお年寄りが落ち葉を掃いていたりする。

どこまでを園の保育として行うか。また、家庭に対してお願いをして、経験を広げてもらうか。そのあたりは、園や地域の事情で異なるだろう。子どもはよく遊ぶ、と言われる。しかし、そのヒントを家庭や地域の暮らしから得るからこそ、あてがいぶちでない、自らが作り出すものになりうる。その上、遊びはもっと大きな暮らしの一部となり、暮らしとの往復関係が生まれてこそ、学びとして生きていく。

もちろん、ただあれこれ子どもを見学連れ回ればよいのではない。知的・社会的経験として意味のあるようにすることが必要である。子どもから見て意味づけが可能になる働きかけや支えを行っていく。例えば、自分たちで見てきたものを再現するといった試みは、ごっこ遊びや積み木を使って、あるいは絵を描いたり、物語絵本にしたりと可能だろう。単なる見学ではなく、そこで何か活動してみたり、五感をフル活用したりすることも大事である。

知性は、至る所で活用する習慣を付けることで伸びていく。机の前に座るとか、先生に教わるとか、本を見るときだけが考えることではない。同時に、豊かに考えるには様々な素材が必要である。暮らしの至る所とかかわることで、知的な働きは広がりを見せ、子どもの生きること自体に根付いていくのである。

## 4 仲間とのかかわりを育てる

砂場で山や土だんごを作る。積み木を組み立てて家や乗り物にする。ブランコやすべり台、ジャングルジムなどの遊具で遊ぶ。部屋では、お絵かきや粘土、工作もできる…。子どもたちが園で行う遊びは、ここに書きつくすことはできないほど、実に様々である。それらの遊びを、ひとりでやることもあるが、仲間と一緒にやることも多い。それは特に、4歳頃になって仲間意識が芽生えてくると、より顕著になってくる。お互いに誘い合って一緒に遊んだり、家に帰ってからそのことを家族に話して聞かせたりすることも増えてくる。

いろいろな遊びの中でも、特に幼児期の子どもが好んでする遊びの代表と言えるのは、「ごっこ遊び」である。ままごとコーナーで家族の生活を再現したり、土や草花でケーキを作ってお店屋さんごっこをしたり、組み立てた積み木の基地を拠点にして探検をしたりする。そういった遊びはやはり、ひとりでやるより仲間と一緒にやる方が断然おもしろい。そして、その仲間とのごっこ遊びを通して、子どもは様々な経験をしている。

ごっこ遊びは、何らかのテーマのもとに、それぞれが役を演じながら進められていくが、誰が何の役をするのか、またどのような内容で進められていくのかを決めなければならぬ。例えば、「お店屋さんごっこ」をするのであれば、誰がお店屋さんになって、誰がお客さんになるのか、お店では何を売なのかを決めなければならない。

また、最初にそういった取り決めがあったとしても、ごっこ遊びは、そのとき、その場の状況によって即興的に変化していく。「お客さん」をしていた子が、今度は「お店屋さん」になりたくなるかもしれない。お店で売っている品物を増やしたり、変えたりするかもしれない。品物を買うとき、最初はお金を渡すふりだけをしていたが、葉っぱをお金にすることを思いつくかもしれない。そうすると、自分のなりたい役や、この先どんな風にしていきたいのかについて、自分の考えをはっきりと相手に伝えることが必要になってくる。それと同時に、相手の言うことをきちんと聞くことも大切である。

いつも自分のやりたいことが通るとは限らない。お互いの意見の食い違いから、けんかになってしまうこともあるだろう。それも子どもの発達にとって重要な経験である。問題をいかにして解決するか、考えをめぐらせ、話し合うことが必要になる。その際、相手の意見に耳を傾けることなく、ただ自分のやりたいことを主張するだけでは、単なるわがままである。時には、自分のやりたいことを我慢して、相手の意見に従わなければならない場合もあることを知る。お互いに考えを出し合って協力しなければ、遊びを進めていくことはできないのである。

もちろん、そのようなことは、ごっこ遊びに限ったことではない。様々な仲間と一緒にやり取りをする中で、他者とのコミュニケーション能力が身についていく。また、誰かが困っていたら手を差し伸べたり、泣いている子がいれば、「どうしたの?」と声をかけてなぐさめたりすることによって、思いやりの心も育つ。人が生きていく上で必要不可欠な人間関係を築くことを学んでいると言える。

ただ、子どもたちだけではうまくかかわり合うことができなかつたり、問題を解決できなかつたりすることもある。そこで、教師の適切な働きかけが生きてくる。子どもたちの年齢や、その場の状況に応じて、子どもたちと長時間活動をともにすることもあれば、教師がほんのひとこと声をかけるだけで、後は子どもたち自身の力でうまくかかわり続けることができることもあるだろう。そのときの状況に合わせて柔軟に教師が対応することによって、子どもたちの仲間とのかかわりをうまく育てることが可能である。

幼児期に仲間とうまくかかわることができなかつたり、仲間から拒否されてしまったりする場合、その後の学校生活、社会生活にうまく適応できない場合もあることが指摘されている。したがって、幼児期に、仲間と思う存分やり取りの出来る機会を十分に保障すると同時に、仲間関係における問題を早期に発見し、必要があれば親や教師、身の回りの大人が適切な援助をし、改善していくことも重要である。

## 5 子どもの発達を促す経験とは

### (1) 工夫する力を育てる

子どもの遊びの中に学びがある。子どもはその生活の至るところで学んでいる。子どもが何をしようと、そこに知的な働きがあり、その働きから知性は伸びていく。ただし、その知性の働かせ方の濃淡はあるのだろう。深く考えて、その考えを通して、子どもの世界が広がっていくとき、子どもの知性はより豊かなものになっていく。

では、特に子どもの遊びのどんなところで、子どもの知性はより強くまた繊細に発揮されるのだろうか。一言でいえば、子どもが遊んでいて、何かにつまずき、さらに工夫しようとするところで子どもは考える。沈黙考するわけではない。何か活動しつつ、子どもは考える。また子どもは興味の湧かないところでは考えるエネルギーが出てこない。さらに、これから何かやりたい、実現したいというイメージがあって、そこから構想や計画やそれを目指して実現しようとする意欲が出てくる。

それがつまり工夫するという場面である。何かやりたいことがあり、形にしたいことがある。でも、相手と意見が合わない、ものが思うように動かない、漠然として具体的にどうしてよいか見当がつかないなど、つまずきが生じる。そのつまずきを乗り越えて、何とかやってみたいことを思う形にしようとする。でも、すぐには思うようにならない。再度試みる。違うやり方はないか、よいやり方はなかったか思い出そうともする。周りを見回し、真似できないかと探す。かんしゃくを起こしたくなるが、そうしたところでやりたいことが実現できるわけではない。適当なことを試みている内に、あそうか、こうすればよいかもしれないと思いつく。実際にやってみる。なるほど、こうすればうまくいきそうだ、さらにやってみよう。急に進展していく。

子どもがやることだから、試行錯誤で、ともかくやってみるということだろう。科学者みたいに実験して試していくというわけではない。深く考えるというより、先に手が出てしまう。でも、手を出して、試すことで、子どもの知性は形となる。手を動かし、

ものを扱い、友だちと動きつつ、子どもは考えるのである。

とはいえ、やたらに走り回り、暴れ回っていたら、工夫するというわけにはいかない。ものを前にぼーっとしていても、考える方向に進まない。つまずいて困ったときに、ゆったりと周りを見回しつつ、どうしようかな、こんな風になってほしいのだけれど、でも、今はこんなだから、などと思っている内に、工夫が生まれる。落ち着いた気持ちが必要なのである。そして同時に、こうしたらどうか、ああしたらどうなるか、などとイメージをあれこれと広げる。思いついたら試すのだが、試しつつ、よくその結果を眺めて、具合が悪ければ改める。

このように、よく動くときと、ゆったりと落ち着くとき、これまでの結果やこれからの経過を眺め想像するとき、といった交代のリズムが生まれるようにしたい。その上で、教師は助言したり、手本を示したりして、子どもの工夫しようとする姿勢を支えることが必要である。何も見通しが立たないとか、どうするか見当もつかないとすると、嫌になる。こんな感じのことならうまくいくはずだと、これまでの経験や教師からのヒントで先が見えてくると、頑張る気になる。技術的なトラブルであれば、教師が指導して教えることもある。ある部分は代わってやって上げてよい。逆に、停滞して繰り返しのなっていたり、だらけていたりしたら、対話を試み、新たな方向に刺激することも必要である。どこかで子どもの工夫するところが出てくるのが大事なところなのである。

## (2) 物事に驚く感性を育てる

この頃の子どもは驚くことが減ったのかもしれない。コンピュータ・グラフィクスで精巧に出来た映像が映画やテレビから流される。ディズニー・ランドに行けば、様々な仕掛けに驚き、楽しめる。何しろ毎日テレビやテレビゲームを見て、機械とコンピュータがあれば大概のことは出来ると思っている。驚くことは驚くけれど、よほどの仕掛けを要すると言った方がよいだろうか。あるいは、始めは驚いても、2回目からはもう予期されたものに過ぎない。それなら園に来て、大して面白いものもない。「え、知っているよ」と片づけられてしまう。ちょっと触って、変化がなければ「つまらないの」と投げ出すだろう。

驚きとは本来は知的な働きである。自分が思っていたことと違うという働きだからである。意外であることに驚く。もちろん、目の前にいきなりものが飛び出てきたら、びっくりする。その一過性の驚きを持続的な関心に変えられるかどうか。そのあたりに、驚きが子どもの成長に意味を持つかどうかを決めるのではないだろうか。

最近の映画のように、ハラハラドキドキ、常に驚きの連続でないと、飽きてしまう状態は、子どもの知的働きを発揮させるものとは言えない。刺激的なものが与えるショックからの驚きだからである。そうではなく、きっとこうなるだろうと予想して、でもそうならなかった、なぜだろう、と考える一連の中の驚きが知的な発達の核となるものである。

そうなるためには、驚きを受け身に与えられるのではなく、自分で見つけ、作り出す

ものにしなくてはならない。誰かが驚きを持ってきてくれるのを待っているのではなく、自分で探すのである。驚きを映画館やテレビや遊園地にだけあるものだと考えるのではなく、見つけようと思えば、今目の前に起こりうるのだと分かることである。

その意味での驚きは「驚嘆（ワンダー）」と言った方がよいかも知れない。「すごいなあ」「不思議だなあ」と思う心の働きである。花一つ取ってもその精妙な仕組みに驚く。アリのよくよく見てみると、奇妙な形をしている。思えば、自然はその種の「ワンダー」に満ちている。だから、自然環境が幼児の発達にとっても大事な意味があるのではないだろうか。

では、幼児をいきなり自然に放り出すと、驚きを感じ、喜んで探索するだろうか。必ずしもそうではないと思う。「気持ち悪い」とか、「痛い」「汚い」という反応がありそうだ。「ねえ、遊ぶものはないの」と言って、滑り台か、それどころかゲーム機を探すのはもっとありそうだ。自然の面白さはある程度、教師の側で導き入れてやらないと、分からない。不思議さをどう子どもに伝えるか。ただ、「不思議でしょう？」と子どもに投げかけて、不思議な様を見せてやっても、それは手品に過ぎない。テレビの方がもっとすごい、という子どもの反応を越えられるだろうか。

子どもが自ら不思議さを発見するように導く必要がある。その発見を誘うために、ちょっぴり不思議な様子を見せてやり、その後は子どもに任せる。一緒になって探すのもよいだろう。自分が見つけた、その思いが驚きを一過性のものから、持続し、次の発見と探索を導くものへと変えていく。受け身の驚きから自ら発見する驚きへ。それを可能にするのが、園の保育というものである。

### (3) 落ち着いて取り組む力を育てる

知的な才能を伸ばすといったときに、元々の生まれつきの能力と、親や幼児教育側で特別な教育を行うことが大事だと思う人が多いようだ。もちろん、それらは大事には違いないが、しばしば見過ごされやすいことがある。一つは、普段の生活の折々に発せられる子どもの関心に応じてやることである。もう一つは、その関心を一時のものに終わらせずに、じっくりと取り組むように育てていくことである。特に、落ち着いて取り組めるかどうかは、どの子どもも示す興味を探求心へと発展させる上で大事な役を果たす。

落ち着いて取り組む力で大事なものは、知的な関心もさることながら、気持ちを落ち着かせ、ゆとりを持って取り組めることである。焦ってやっても、知的な事柄は急げるわけではない。時間をかけるしかないことはたくさんある。その上、余裕がないと、どうしたらよいかと工夫したり、違う手だてを思いついたり、時間はかかるけれど面白いやり方を試してみたりできない。いわば目指すところにまっしぐらに進んでしまい、うまくいかなくなる。あるいは、いつもと同じやり方になってしまって、少しも発展しない。

頑張っ、ともかく前に進むというやり方でうまくいくこともある。でも、「押してだめなら引いてみる」ことも必要である。引いてもだめなら、まわりを見回してどうできるのか、別なやり方がないのか考えてみる。それが工夫ということである。

時間をかけようとしても、ただぼんやりとしていては意味がない。とって、どうしよう、どうしようと気が動転しても、思うような工夫が思いつけるわけではない。一つには、長い時間がかかることの見通しておく必要がある。どんな遊びでも課題でも根気よく続けるしかないことがある。それは飽きてしまうけれど、先行きどうなるかのイメージがあれば、それを楽しみにやっていける。編み物をするときのように、その一つ一つの編み目が全体としてどんな風になるだろうかと分かるとよいのである。

もう一つは、行き詰まったときに別なやり方を考えられるようにすることである。それには経験が大切だし、先生のヒントも必要だ。だが、同時に、ともかく試行錯誤してみ、その結果を注意深く見ることなのである。やたらに試しても、その結果どうなったかを見ていないと、役立たない。かえって焦りを増してしまふ。試してみ、どうもだめそうだとか、少しできたとか、こうなっているらしいなど見当がつくことや、少しずつ進展していくことが大事なのである。目標に近づくというより、その様子や仕組みが分かるといったことである。智恵の輪を外すという場合のように、やみくもにやるのではなく、試してみ、その仕かけをよく見て、分かっていくことが大事なのである。

そのために、教師は様々に援助をしていくが、その多くは相当に微妙なものである。自分で工夫することが大事だから全部指示するわけにはいかない。放っておいては自分で落ち着いて考えることができるとは限らない。子どもが興味を持って取り組み始めたものをどうやって支え、その発展を助けるかが援助のしどころである。子どもの様子を見て、踏み込んでヒントを出すこともあるだろう。一緒に「どうしたらよいだらうねえ」と考えつつ、子どもの気持ちを落ち着かせ、考えればできるよ、という呼びかけを暗黙の内にしていることもある。どの程度踏み込むかは、子どもの能力や経験、また性格によって変わる。少しでも長く取り組めること、そしてそこに工夫が出てくることを目指したい。やり方のヒントと共に、子どもの気持ちの安定、そして子どもの興味が活発になるクラスの雰囲気大事になる。

#### (4) 調べる力を育てる

幼児期の子ども遊びを中心とした保育において、「調べる」という活動がそもそも入り込むものなのだろうか。実際の保育の様子を見ていれば、子どもが庭で虫を捕まえて、昆虫図鑑を見たり、買い方の本を調べて、どうやったら飼えるのだろうかと考えたりすることは珍しいことではない。幼児向けの図鑑も簡単なものから詳しいものまでかなり出ている。それ以上のことが可能なかどうか、考えてみたい。

幼児期の特性を考えれば、教室で机に座って、長い時間をかけて本を読むという形で調べることはあるはずもない。では、幼児は本を読めないかというと、そうではない。絵本の類を自分で読んでいる光景はよく園で見かける。物語絵本だけでなく、図鑑とか、知識があれこれ出ている絵本を見ていることもよくある。難しいところは分からないのだけれど、知識を集めるのは好きなのである。

ただ、その限りでは、知識は断片的で身についたものにならない。「霜柱って、水が凍

るんだ。毛細管現象って言うんだ。」と分かって、その冷たさを感じてはいないとか、水が確かに細い管を上る様子を見たりして、実感を持たなければ、知識は子どもの学びの活動をさらに生み出すものにはならない。使えるものにならないのである。

実感のもてる活動の中に調べる活動を入れ込んでいくと、調べる活動が広がりを見せる。何も本を読むだけが調べることではない。友だちや先生に尋ねてもよい。親に聞いたりもするだろう。見学に行くこともある。消防署に行ったりして、体験するだけでなく、説明の方に質問をすることもあるだろう。博物館や美術館に行くことも出てきた。丁寧に観察したり、体験について振り返ったりすることも調べることになる。対象について詳しく知ることだからである。

調べたことは表現することで身についたものになっていく。言葉や絵や作品に表す。友だち同士で話して、「こうなっていたんだ」と言いながら、確認する。その後、またそのものを見に行ったりすると、今度はもっと焦点を絞ってみることが出来て、観察という活動に近づいていく。子どもたちと教師の対話も大事になる。ひとりで子どもがきちんと調べられるということはまずない。「どうなっていたかな」、「ここはどうなのだろう?」と教師が投げかけることで、子どもは、調べたり、思い起こしたりすることに力を改めて注げる。

調べることで完結して、それを発表することが大事なのではない。発表しても構わないが、それ以上に、子どもの学びの活動が発展することが大切なのである。1回の見学とか、読書とかで終わらない。もっと繰り返すのである。どうしてだろう、もっと詳しくするとどうなっているのだろうか、といった疑問を解決しようと、活動していく。虫でも、消防署でも、何でも、さらに詳しく見ていくと、また次のやってみたいことや疑問が湧いてくる。それをもう一度調べることにつなげる。活動は、1回きりの断片的知識を得て満足することから、もっとダイナミックで、長い時間を要するものへと変容していくだろう。

調べることを今よりもっと重視しようというのは、座って、ノートを取るとか、長い時間読書することを増やそうというのではない。自分が興味を持った対象について、もっと知ろう、かかわろうというために知識を獲得し、その知識を使って、対象について熟知し、かかわりを増やすことなのである。体験することと、本を読むことやあるいは他の人から話を聞くことをもっとつなげてみてはどうだろうか。

